

三つの旗の下

サンフランシスコ唐人街の国旗

任 哲[†]

Under Three Flags: San Francisco Chinatown and Chinese Shadow

Zhe Ren

In the United States, it is a phenomenon that immigrants raise a national flag to express their love to the motherland. In San Francisco's Chinatown, Chinese society used to raise the ROC (Republic of China) flag to represent their identity during the war. However, when the motherland divided into ROC and PRC (Peoples Republic of China), and each side represented their national flag, the identity crisis of Chinese society was inevitable. During the Cold War era, it was the ROC national flag that dominated Chinatown because of the anti-communist ideology. With the rising presence of the PRC, Chinese society began to raise the PRC national flag instead of ROC's. Through a case study of San Francisco's Chinatown, the author discussed how the cross-strait relationship reshapes Chinese society in North America. The author argues that the replacement of the national flag in Chinatown is more like an anti-independent action than an identity crisis.

サンフランシスコ・^{チャイナタウン}唐人街を歩くと、米国の星条旗、中華人民共和国の五星紅旗、中華民国の青天白日滿地紅旗が入り交ざった光景を目にする。米国政府の公的組織を除けば、この街で国旗¹を掲げるのは多くが中華系の民間団体である。それにしても、狭い地域内で三つの旗がこれほど密集しているのは異常で、ほかでは見られないユニークな景色でもある。

なぜ唐人街にはこれほど国旗が密集しているのか？三つの旗の下²で生活する人々は、シンボルとしての国旗をどのように理解していたのか。その理解には何らかの変化があったのか。本稿は中華系の会館が掲げる旗を手がかりに、アメリカの華人社会が抱える「中国の影 (Chinese Shadow)」を考察したものである。しかし、これはあくまでも聞き取り調査の上で書き上げたエッセイであり、学術論文ではないことを先に明記しておきたい³。

本稿の構成は次の通りになる。まずは、唐人街で最も歴史の古い会館の歴史と現状を考察し、唐人

[†] ジェトロ・アジア経済研究所研究員

¹ 一つの中国という前提のもと、中華人民共和国は中華民国の旗を国旗であると認めていない。同様に、中華民国も同じく中華人民共和国の旗を国旗として認めていない。本稿では利便のために二つの旗を国旗の範疇にいれて議論するものであり、主権論争をするものではない。

² 「三つの旗」の表現はアンダーソンの邦訳著書『三つの旗のもとに—アナーキズムと反植民地主義的想像力』（2012年、NTT出版）から借用したものである。

³ 華人に関する書物は膨大で一人の研究者が網羅できるものではない。関心のある読者は Wang1991, Pan1998, 斯波 1995 などを参考にしてほしい。

街で起こりつつある「易幟」(Flag Replacement)の本題を導き出す。次に、華人と中国のかかわりの歴史を振り返った上で、兩岸関係の狭間で生きる華人社会の葛藤を描き出す。さらに、北米で最も影響力のある華人団体—中華会館に焦点を絞って、なぜ旗の色が変わったのかを考察する。最後に、新しい時代に生きる華人社会の意識の変化と今後の展望について簡単に触れる。

1. 「岡州会館」の景色

サンフランシスコ・唐人街、その中心地の一角に「岡州会館」(Kong Chow Benevolent Association)という立派な建物がある。建物は中国の伝統要素をモダン建築に取り入れたもので、煩雑な中華街の中では一際目立つ⁴。建物の1階は郵便局、2階にはクリニックと旅行会社、3階は会館の事務所、4階には小さなお寺(Kong Chow Temple)(1851年設立)がある。お寺の中には、商売の神様である関羽像があり、全米最古の中華系のお寺⁵として地元の人に親しまれている(Choy 2012)。「岡州」という地名は隋・唐の時代に使われたもので、明清時代以後は使われていない。唐は中国歴史の中でもっとも輝かしい時代であることから、「岡州」という地名にロマンを感じる人も多い。それゆえ、後世の人々は「岡州」という地名を好んで使ったと思われる。

「岡州」は、今日の地図でいうと、広東省江門市新会およびその周辺エリアになる。新会といえば中国近代史に名を残したビッグネームが2人いる。1人は戊戌変法で有名になった梁啓超(Liang, Qichao)、もう1人は外交官として有名な伍廷芳(Wu, Tingfang)で、北洋政府の代理総理、中華民国政府の外交部長を務めた人物である。サンフランシスコの「岡州会館」の看板は、この伍廷芳が駐米大使を務める際に書いたものである。

会館の中は中華民国の「色」が強く残っているだろうと思い、筆者は会館の事務所を訪問した(2016年9月)。事務所といっても、常勤のスタッフは2人しかいない。30~40人ほど入れる会議室の壁には会館の歴史を物語る写真、ペナント、記念グッズが数多く飾られている。その中には、中華人民共和国国務院僑務弁公室や広東省江門市政府、鶴山市政府などから送られたものが目立つ。しかし、会議室のどこを見渡しても孫文の写真が見当たらない。少し寂しさを感じるの筆者だけではないだろう。会議室の最も目立つところに大きな集合写真が一枚飾られてあった。それは、習近平国家主席が2015年にシアトルを訪問した際、北米の華僑団体関係者と撮った写真である(もちろん、岡州会館の代表も集合写真に入っている)。会議室の入り口付近に飾られた大きな星条旗だけは、ここはアメリカであることを主張している。

会議室の窓ガラスから外を眺めると、道路を挟んで斜め向かい側にある中国国民党駐米州総支部の文字と国民党の旗—青天白日旗が目映りこむ。この二つの団体、かつては友好的な関係であった。竣工を祝う当時の新聞(『少年中国晨报』, 1977年12月16日)からその状況を伺うことができる。新聞一面には一同で竣工を祝う唐人街各団体の名前が羅列されてある。先頭は中華総会館およびその傘下にある各団体であり、その後には、花県会館、東華社、全美華人福利総会、華人福利総会美西分会

⁴ 建物を建設したのは大林組(アメリカ支社)で、1977年に完成した。このプロジェクトは大林組にとって北カリフォルニアの華人コミュニティでの初事業でもある(『少年中国晨报(The Young China)』1977年12月16日)。

⁵ 「岡州会館」から数ブロック離れたところにある「天后宮」(航海の安全を祈る寺で1853年に設立)も北米最古の中華系のお寺として親しまれている。

(西海岸支部)、中国国民党総支部、華僑反共救国会などの名前が並ぶ。時代は変わり、現在の「岡州会館」は国民党との距離を保ちながら唐人街での活動を展開している。二つの建物は直線距離でいうと30メートルほどしか離れていない。しかし、窓ガラスに映る向かい側の青天白日旗は遠く離れた存在に感じる。

興味深いのは会館が掲げる旗の色である。「岡州会館」は中国大陸側寄りに思われているものの、中華人民共和国の旗を常に掲げてはいない。年中、中華民国あるいは中華人民共和国の旗を掲げる他所の団体に比べると、当会館は控えめである。アメリカの一団体としてどの国旗を掲げるべきなのか。会館側は細心の注意を払っていると考えられる。国民党駐米総支部の常務委員であった徐楚南によると、「岡州会館」は従来から国旗を積極的に掲げる団体ではないが、中国大陸側のサンフランシスコ総領事が一度訪れてからは、国民党と距離を置くようになったという（Radio Free Asia ウェブページより、<http://www.rfa.org/mandarin/yataibaodao/qs-10252012094249.html>, 2016年12月20日アクセス）。

2016年9月11日に、会館側は「中華人民共和国の式典・慶事、及び重要人物来訪時は五星紅旗を掲げ、通常は星条旗と会館の旗を掲げる」という決議案を採決した。同月の22日に、サンフランシスコ総領事が会館を訪れ、会館では初めて五星紅旗を掲げたのである。中華人民共和国外交部はこの出来事を大きく宣伝していた。面白いのが、同式典に参加した唐人街のほかの華僑団体への言及である。サンフランシスコ唐人街の中華総会館及びその7つの中核団体のうち、4の団体（寧陽総会館、陽和総会館、三邑総会館、人和総会館⁶）の代表がこの式典に参加したと外交部は強調する。言い換えると、上記の4団体に「岡州会館」を含むと、5つの中核団体が中華人民共和国寄りであることを意味するものである。（中国外交部ウェブページより、http://www.fmprc.gov.cn/web/zwbdt_673032/jghd_673046/t1400349.shtml, 2017年8月1日アクセス）。

2. 兩岸関係の狭間

孫文の辛亥革命から日中戦争に至るまで、海外の華人社会は母国に対し、人的、物質の面で多大な貢献をしてきた。広東からの移民が多いサンフランシスコの唐人街では秘密結社である洪門の勢力が強く、洪門系の致公堂の総堂も唐人街にあった⁷。致公堂は革命派の孫文を積極的に支援しており、孫文自身も1903年にハワイで致公堂に加盟していた。孫文が革命の資金を集めるために、個人の名義で発行した債券（当時の華僑は「孫文銀紙」と呼んだ）を発行した場所も、サンフランシスコである⁸。当時、この債券は革命軍にとって重要な資金源となっていた。華人社会が革命軍を支援したエピソードは数え切れないほど多く、唐人街と中華民国の深いつながりを物語る。

⁶ 7つの中核団体のうちに、規模が最も大きいのは寧陽総会館である。上で述べた徐楚南がメディアの取材を受けた2012年の段階で、寧陽総会館はすでに中華民国の旗を降ろした。しかし、中華人民共和国の旗をまだ掲げていなかった。中核団体については、第3節で詳細に述べる。

⁷ 洪門系と自称する団体は数多かったが、洪門は必ずしも一枚岩ではなかった。地縁、血縁、言語など様々な要素によって団体の分離・合併が繰り返されていた。そして、各自の勢力範囲をめぐる衝突—「堂闘（Hatchet War）」が長年続いていた（内田1976）。「堂闘」に関しては、司徒美堂口述（1951）を参考にしてほしい。

⁸ 孫文がアメリカ大陸に上陸した際、北米の洪門系団体は康有為（Kang, Youwei）を代表とする保皇会（清朝の皇帝を守る会、維新派ともいう）と密接な関係を持っていた。孫文の革命活動は保皇会に対する大きな脅威であり、両者は互いに洪門を味方につけるため激しい論戦を繰り返した（高2009）。



図1 日中戦争時のポスター

華人社会における祖国への強い思い出は日中戦争時にピークを迎えた。アメリカ社会における華人差別については様々な記録があるのでここではあえて言及する必要もない。米国における華人に対する考え方が少しずつ変化し始めたのが日中戦争である。この変化は、林雨堂 (Lin, Yutang) の小説『Chinatown Family』で良く現れている。弱小国である中華民国が軍事大国である日本と戦うことに對し、アメリカ人は思わず親指を立てたという。差別を我慢しながら、金儲けに没頭した華人が、華人としての誇りを感じるようになったのもこの時期からである。図1は1940年代に制作したポスターである⁹。これは戦時中の中国への資金援助を主な活動とする United China Relief (ニューヨークに拠点を置く) という組織が作成したものである。日本と戦う中華民国 (アメリカ国旗と並ぶ青天白日滿地紅旗に注目してほしい) をサポートするこのポスターは、林雨堂の小説と同じものを語っている。

しかし、日中戦争が終わると、国民党と共産党は合作から対立となり、やがて国共内戦が始まる。さらに中華人民共和国と中華民国が台湾海峡を挟んで対立する局面が長続きすると、海外の華人は難しい立場に立たされた。大陸側の共産党政権も、台湾側の国民党政権も積極的に海外にいる華僑・華人を味方につけることで自己の正当性を強調していた。アメリカの洪門系団体にも分裂が見られ、司徒美堂を代表とする致公堂の一部は致公党 (政党) へと改称し、共産党支持へと回った。一方で国民党寄りの五洲洪門致公堂のように、致公堂の名称を継承し、反共の立場を今日まで継続している団体もある。

冷戦時代、サンフランシスコ唐人街は反共の一基地として重要な位置を占めていた。当時、中華民国の青天白日滿地紅旗が唐人街の至る所に掲げられていた様子は安易に想像がつく。米中国交正常化

⁹ University of North Texas Digital Library, <http://digital.library.unt.edu/ark:/67531/metadc472/>, 2016年9月21日アクセス。

以後、華僑・華人と中国大陆との交流は徐々に増えた。中国大陆からの留学生と移民は唐人街に新たな活力を注入した。しかし、唐人街では依然として中華民国の色が強く残っていた。ここは中華民国側が外交活動を行う重要な場所であり、数多い政治家がサンフランシスコ唐人街を訪れていた。唐人街の各界が祝う国慶節も、中国大陆側の国慶節（10月1日）ではなく、台湾側の国慶節（10月10日）であった。この様子が大きく変化し始めたのは90年代後半からである。

1996年、台湾では初の大統領直接選挙が行われた。直接選挙に対し、中国大陆は猛烈に反発し、いわゆる「台湾海峡ミサイル危機」にまでエスカレートした。大統領選を制した李登輝の言動にも変化が見られた。李はそれまで控えめであった大陸批判から徐々に変化し、やがて「特殊な国と国の関係論」（いわゆる二国論）を展開するようになった。この頃から台湾の華僑政策にも変化が起き始めた。華僑政策を担当する中華民国僑務委員会は、仕事の重心を老華僑から台湾に関わりの深い新しい世代の華僑・華人へとシフトしたのである。北米の場合、各地の台湾同郷会のような組織との関係を強化する一方、古参の華人協会との関係を粗末していた。同時に、僑務委員会の委員の出身地も大きく変化した。従来は広東籍・福建籍が大多数を占めていたが、この時期から台湾籍の委員の割合が大幅に増えてきた（曹・蔡2012）。

2000年、台湾の総統選で民進党の陳水扁が勝利した。陳は独立志向の強い政治家であり、在任中に「台湾独立」の可否を問う全民投票まで実施した（結果は否定票が過半数を占めた）。僑務委員会の活動もこの「独立」をサポートする方向へと変化し、歴史の長い華人協会も揺れ始めた。その揺れを物語る一つのエピソードを取り上げよう。時の僑務委員会長を務めた張富美氏は、民進党政権の新しい華僑政策を次のように述べた。すなわち、僑務委員会が最優先するのは、中華民国のパスポートを所有し、中華民国と密接な関係がある海外に住む「新台湾人」であるという。次に優先するのは、台湾で教育を受けた華僑であり、その次に優先するのが老華僑であるのだ。この三等級発言は海外の華人社会で大きな物議を醸した。特に歴史の長い華僑団体は大きく失望し、その発言に反発していた。そこで、張氏が2001年にニューヨークを訪問する際、地元の華僑団体は従来のような歓迎式典を行わず、簡素化した歓迎式にすることで不満を表していた。また、晩餐会に参加しない団体も続出したという¹⁰。

一方で、中国大陆側は改革開放以後積極的に海外の華僑業務（中国語では僑務という）を進めてきていた。50年代から70年代に至るまで、中国国内での政治環境（土地改革、反右派闘争、文化大革命）及び中国をめぐる国際環境（東南アジアにおける反華人騒動）など様々な要素があり、積極的な僑務活動を行うことができなかった。転機が訪れたのは鄧小平時代になってからである。大陸側は華人の資金を国内に誘致することで経済発展に結び付けるだけではなく、華僑・華人の影響力をを用いて祖国統一という悲願を実現することを目指していた¹¹。90年代に中華民国僑務委員会長を務めた蔣孝嚴が、兩岸の僑務政策についての説明が最も象徴的である。蔣氏によると、60年代は中華民国側が僑務政策を「独占」しており、80年代までも「優勢」を保っていたが、90年代からは「競争」する

¹⁰ 2002年に、時の行政院長游錫堃、呉淑珍（陳總統の夫人）がニューヨークを訪れた時にも華僑団体から冷遇を受けていた（南方網、<http://www.southcn.com/news/hktwma/liangan/200209230633.htm>、2017年7月1日アクセス）。

¹¹ 二重国籍を認める台湾側の政策と異なって、中国大陆側では二重国籍を認めていない。これは台湾側の華僑政策が大陸側より成功したもう一つの要因でもある。中国大陆側の華僑政策の変遷については、Suryadinata (2017)、To (2014)を参考にしたい。

状況に入ったという（僑務委員会編 2010, 139 頁）。

サンフランシスコ・唐人街における旗の色が変わり始めたのも 2000 年以後である。唐人街で古参の団体になる人和総会館、南海福蔭堂、開平同郷会、儀英工商総会、東華社などは 2002 年に中華人民共和国の旗を掲げていたのである。いずれの国旗掲揚式典には中華人民共和国サンフランシスコ領事館側の担当者が出席しており、祝辞には「二国論」・「台湾独立」に反対する文言が入っているのである。長い間、兩岸ともに海外の華人社会を味方にする事で自己の正当性を主張してきたことを考えると、会館が掲げる旗の色が変わったというのは、大きな象徴的な意味合いを持つ。その後、唐人街の旗の色は徐々に変化したものの、規模と影響力の大きい団体は依然として中華民国の旗を掲げており、兩岸の競争関係は続いていた。その中で、最も古くて影響力のある団体である中華総会館が中華民国の旗を降ろす事件が起きた。

3. 中華総会館の衝撃

サンフランシスコの唐人街には様々な会館・協会が存在しており、その数と実態は把握できていない。その中でもっとも有名なのが中華総会館（Chinese Consolidated Benevolent Association）で、150 年以上の歴史を誇る。中華系会館としては北米で最も古い当会館は 7 つの中核団体によって構成され、上で述べた岡州会館はその一つである（他の 6 つの団体は、寧陽総会館、肇慶総会館、合和総会館、陽和総会館、三邑総会館、人和総会館となる）。これらの団体のメンバーのルーツは多くが広東省であるものの、地域と言語の違いから、会館の合併と分離が繰り返されてきた¹²。

中華総会館の意思決定は評議会制度を採っており、評議員（全部で 55 名）は各団体から選ばれたものである。各団体に割り当てられた評議員の数は、その団体の規模、歴史的経緯によって異なり、一番多いのが寧陽総会館（27 名）で、その次が肇慶総会館（8 名）である。残りの団体は、合和総会館が 6 名、岡州総会館が 5 名、陽和総会館が 5 名、三邑総会館が 3 名、人和総会館が 1 名である。評議会の主席の任期は 2 ヶ月で、寧陽総会館の主席が、1～2 月、5～6 月、9～10 月の評議会の主席を勤める。ほかの団体は順番に残りの月の評議会主席を勤めることになる¹³。

中華総会館の宗旨には、①華僑およびその事業が差別を受けた際に法的支援を行う。②出入国の際に不合理な取調べを受けた華僑を支援する。③華僑社会内部の揉め事を調停する。④華僑子女の中国語教育を行う。⑤華僑病院およびその他の慈善事業を行う。⑥華僑社会の公益事業を行う、と書いてある。しかし、会館のホームページにも書いてある通り、時代の変化により、前の 3 項目についてはもはや会館ができることではない。今日では、後ろの 3 項目および華人の参政を支援することが上げられる。

会館の宗旨には、中華民国を支持するのか、中華人民共和国を支持するのか明文化していない。し

¹² 各会館の地縁関係を大まかにいうと、寧陽総会館は台山出身者が中心で、日常では台山方言（Toisanese）を話す。同じく台山方言を使うのは、合和総会館（恩平・開平出身が中心）、岡州会館（新会・鶴山出身者が中心）、陽和総会館（中山・東莞・増城・博羅出身者が中心で、一部は広州方言も使う）がある。肇慶総会館は肇慶エリアの出身者が中心で羅広方言を、三邑総会館は南海・番禺・順徳出身者が中心で広州方言を、人和総会館は赤溪の客家が中心で、客家語を話す。各会館の歴史についてより詳しく知りたい方は内田（1976）、貴堂（2012）、Nee & De Bary（2014）、Speer（1870）を参考にしてほしい。

¹³ 総会館の詳しい規則については、総会館のウェブページ（http://www.ccbausa.org/about_us/assets/byLaw.pdf）を参考にしてほしい。

かし、歴史的な経緯から会館は長い間ずっと中華民国の旗を掲げていた。7の中核団体の中にはすでに中華人民共和国の旗を掲げる団体が現れており、いずれ中華総会館にもその話題が及ぶことは周知していた。その前兆として、2011年に中華総会館の中に飾ってある「團結報国」という横額を降ろすかどうかをめぐって評議会の中で意見が割れる出来事があった。横額は時の中華民国総統である蒋介石が中華総会館傘下の組織である華僑反共総会宛てに送ったものであり、貴重な歴史的資料でもある¹⁴。この額の中にある「反共」文字に異議を唱える評議員たちが現れ、評議会の中で意見が分かれたのである（『星島日報』2012年10月12日）。そして、2013年の5月に行われた評議会では、ある評議員から中華民国の旗を下げる提案がなされた。その理由は、中華総会館はアメリカで登録した団体であるので、政治的意味合いの強い中華民国の旗を掲げるべきではないというものであった。この提案は、当日の評議会でも過半数を取って通過することになり、会館側では中華民国の旗を降ろしたのである。

中華総会館が旗を降ろして間もなく、時の中華人民共和国サンフランシスコ総領事であった袁南生が会館を訪れた。慣例上、中華民国の旗を掲げる組織に中華人民共和国の公職を持つ人が公式に訪問することは禁止されていた。旗を降ろしたので、総領事は慣例を破ることなく、初の公式訪問を実現することができたのである。地図でみると、中華総会館は上で述べた岡州会館の真横にあり、道を挟んだ真向い側には中国国民党駐米州総支部がある。国民党総支部の目と鼻の先での出来事であることから、中華系メディアはこの事件を大きく取り上げた。大陸側から見れば、僑務政策の成功事例であり、自慢したい出来事であるが、台湾側の立場から見ればそうではない。のちに外交学院党書記に昇進した袁氏は、回顧録の中で、自身がこの出来事を積極的に推進したことを顧みる（『中華英才』ウェブサイト、<http://www.zhyc.com.cn/2015/0417/154.shtml>、2016年9月20日アクセス）。

会館が旗を降ろしたことに反対する声も多い。一部の評議員は決定手続きに問題があると認識し、サンフランシスコの地裁に訴えた。裁判所の結果が出たのは2016年7月であり、原告側の勝利と判断した。その根拠を簡単に述べると次の通りになる。会館の規則には、「重大事項に関する決議は3分の2以上の賛成が必要」と書いてある。しかし、旗を降ろするような「重大事項」では、過半数しかとっていない。したがって、手続きに問題があるので、旗を戻すべきである。

しかし、一旦は降ろした旗を戻すのかになると、降ろすことに賛成した人たちの声も無視できない。課題を残したまま、どちらの旗も掲げていないのが現状であった（2016年9月20日の段階）。国民党側からいうと、中華総会館での出来事は大きなショックである。幸いのことに、中華総会館の中核団体の中でも規模が大きい肇慶会館、そして、孫文とゆかりのある五州洪門致公堂はいまだに青天白日滿地紅旗を掲げている。一部のメディアはこれを台湾側の馬英九政権の無作為に結び付けて批判する。確かに、馬政権は「外交休兵」のスローガンを提示し、大陸側と台湾側が海外華人社会における「奪い合い」をやめることを主張した。しかし、歴史的な文脈からいうと、これは馬政権の問題というよりは、李登輝・陳水扁政権の僑務政策の影であると言える。

ここでもう一度中華総会館の宗旨を思い出してみよう。会館はあくまでも米国における華人の社会進出の支援、華人社会の共益事業・福祉向上を目指すものであり、必ずしも民国と共和国のどちらを

¹⁴ 華僑反共総会は1950年11月14日にサンフランシスコの中華総会館で成立した。横額はその活動を奨励する形で蒋介石が1972年に送ったものである。時代の変化もあり近年はほとんど活動していない。

選ぶ必要性もない。たとえ、民国の旗を降ろしたとしても共和国一辺倒を意味するものでもない。ただし、「中華民国＝台湾独立」という構図になると話は変わる。「中華民国を支持するのか、それとも中華人民共和国を支持するのか」はさておき、台湾独立を支持しないという立場を表明する意味で、旗を降ろしたと理解したほうがより適切ではないだろうか。

問題は会館の「易幟」がいわゆる「台湾独立」勢力にどれほどの圧力になったのかである。そもそも、海外の華人社会は国民党を支持する人が多い。国民党が共産党との内戦で敗北はしたものの、海外華人社会における支持基盤は非常に安定していた。中国大陸側による積極的な僑務活動とそれに伴う「易幟」は国民党の支持基盤を奪う過程でもある。しかし、「一つの中国」という大原則を支持しているのは国民党であり、独立志向の強い民進党ではない。民進党が重視するいわゆる「新台湾人」の団体の間で上記のような「易幟」の動きがあるとは思えないし、関連する報道も見当たらない。要するに、中国大陸側の僑務政策がたとえば外交部が宣伝しているように成功したといっても、最も肝心の民進党の支持基盤に何らかの影響を与えたのかについてはより慎重に議論すべきなのである。

中華総会館の衝撃を受けて、岡州会館は国旗に関する新しい規定を制定した。それによると、五星紅旗を掲げるのは国慶節を始めとする重要な祝日、あるいは重要人物が来訪した時にのみとなる。通常は、アメリカ国旗と会館の旗を掲げているという（『星島日報』、2016年9月13日）。五星紅旗にしる、青天白日滿地紅旗にしる、強い政治的な意味合いが付与された以上、どの旗を掲げても面倒は避けられない。それなら、普段は星条旗、カリフォルニア州旗、会館の旗などを掲げるのが一番無難である。イベントがある時はその時に判断すればいいのである。

終わりに

近年、兩岸の要人の相互訪問はかつてにないほど頻繁であり、2015年には兩岸の政治指導者である習近平と馬英九の会談まで実現できた。一方で、台湾海峡から遠く離れているアメリカでは、立場表明と旗の色を選ぶことで地味に悩む人々がいる。国家の主権を象徴する意味で国旗は重要な意味を持つ。公的組織以外の個人・団体が祝賀のために国旗を掲げることに意義がある。しかし、サンフランシスコ・唐人街というアメリカの中にある一つのエスニックコミュニティで、どの旗を選ぶのかで悩むことは皮肉に感じる時もある。

「国共内戦」は終わっても、華人社会における葛藤はいまだに続いている。この葛藤は、清朝末期に中国の知識人の間で起きた立憲派と革命派の論争とも似ている。当時、中国国内で論争は激しかったものの、互いに相手を敵とは思っていない。ところが、海外の華人社会では、立憲派と革命派は水と火のように相容れなかった。海外では、限られた華人社会の資源の奪い合いになるので、より対立が激しいものになりやすかったのであろう（侯2009）。

華人社会にみる「中国の影（Chinese Shadow）」について、歴史学者の斯波義信は次のように述べる。

古来、中国は政治単位であるばかりでなく、内なる諸種族を同化融合する実績を積んできた文化の単位でもあった。異国の地に同化吸収された人々はともかく、移住者の「胸中の中国」の存在感は大きく、ことに文化中国という統合体に対する安着は容易には消えない。特に政治統一が

なるか、あるいはなりつつあるとき、「中国の影」は心理的に大きく映ってくる。逆に分裂がきざして国・共の抗争がながびけば、期待は幻滅となり、そこに残るのは愛郷心にとどまるだろう（斯波 1995, 168-169 頁）。

法的な市民権を重視するアメリカと違って、アジアは血縁・地縁といった文化的側面の帰属意識を重視する。アメリカ社会における華人の帰属意識の悩みも文化に由来するものであり、これは唐人街で生まれ育った人々に顕著に表れる。この葛藤は世代ごとに変化し、やがてアメリカナイズされるのであろう。

岡州会館で撮った写真を整理する時、あるパンフレット写真に目が留まった。それは香港のアーティスト林東鵬（Lam Tungpeng）の作品『The Curiosity Box Series』である。茶色の紙袋に書いた文字がとても印象深かった。その文字を借りて本稿の締めをしたい。

“CHINESE AS AN IDEA, BUT NOT NATIONALITY”

参考文献

英語

- Choy, P. (2012). *San Francisco Chinatown: A guide to its history and architecture*. City Lights Publishers.
- Nee, V., & De Bary, B. (2014). *Longtime Californ': A documentary study of an American Chinatown*. Pantheon.
- Pan L. (1998). *The encyclopedia of the Chinese overseas*. Harvard University Press.
- Speer, W. (1870). *The Oldest and the Newest Empire: China and the United States* (Vol. 1). SS Scranton.
- Suryadinata, L. (2017). *The Rise of China and the Chinese Overseas: A Study of Beijing's Changing Policy in Southeast Asia and Beyond*. ISEAS-Yusof Ishak Institute.
- To, J. J. H. (2014). *Qiaowu: Extra-territorial policies for the overseas Chinese*. Brill.
- Wang G. (1991). *China and the Chinese Overseas*. Times Academic Press.

日本語

- 内田直作（1976）『東洋経済誌研究Ⅱ』千倉書房。
- 貴堂嘉之（2012）『アメリカ合衆国と中国人移民：歴史のなかの「移民国家」アメリカ』名古屋大学出版会。
- 斯波義信（1995）『華僑』岩波書店。

中国語

- 曹雲華・蔡秋燕（2012）「台湾の僑務政策：嬗変と延続」『東南亜研究』，第2期。73-82頁。
- 高偉濃（2009）『二十世紀初康有為保皇会在美国華僑社会中的活動』，学苑出版社。
- 僑務委員会編（2010）『我国僑教政策未来發展趨勢之研究』（台湾）僑務委員会委託研究（http://www.ocac.gov.tw/OCAC/File/Attach/4449/File_4945.pdf）。
- 侯宜傑（2009）『二十世紀中国政治改革風潮：清末立憲運動史』中国人民大学出版社。
- 司徒美堂口述（1951）『我痛恨美帝：僑美七十年生活回憶錄』光明日報社。